

わたしの 能登暮らし

【多】中村さん



能登町の観光ガイドブック「のつとるる」の表紙の写真は私が撮ったものです。立山が入ったこの写真は、外国人にも人気なんです。

私の父は穴水町の出身のため、小さい頃から毎年夏には穴水町を訪れていました。また、私の母はインドネシア出身です。そのため英語に触れる機会が多かったのですが、英語は得意な語学です。今までの自分の経験と持っているスキルを活かして、人とは違うことがしたいと思っていました。観光分野を通して町を盛り上げる、能登町地域おこし協力隊の仕事と出会いました。

能登町には外国人が魅力と思う

ものがたくさんあると感じてはいたものの、着任当初は誘客のノウハウがないため、悶々とした日々が続きました。そんなとき訪れた春蘭の里で、実際に多くの外国人が訪れているのを見て、自分が感じたことは間違いないと確信しました。

外国人誘客をするなら、外国人向け旅行会社に営業するしかない！と、町内を回り写真などの営業素材を収集して、県主導の外国人旅行客の商談会に出かけ、営業方法などを学びました。そして、ようやく準備を整えた今年2月、重要な商談会の当日になると39度の熱。身の回りのことすら十分にできない状態でしたが、なんとか気合いで乗り切ることができました。その商談会でできたつながりを大切にして営業活動が続けてきた結果、今では旅行会社の方から、「先日、能登町にお客さんを連れて行ったよ」などの話を聞けるようになってきました。今年9

中村莉光さん

平成6年に金沢市内で生まれて、すぐ大阪へ。大阪市立大学理学部を休学し能登町へ移住。平成27年7月から、能登町地域おこし協力隊として活動中。

月には、国内最大の外国人誘客商談会に行き、能登町をPRしてることができました。そこで出会ったスイスやフランス、ロシアなど世界中の旅行会社とやりとりをしながら、次は町内の宿泊施設に、外国人宿泊のための協力ができたらと思っています。能登町を楽しむ外国人旅行者の人たちの姿を見かけることが珍しく無くなる日も遠い話ではありません。

今は仕事ばかりですが、友人に「釣り」を教えてもらいました。ここに来て新たに増えた趣味です。これからは、もっともっと能登町暮らしを楽しみたいと思っています。

あなたの移住・定住を応援します

能登町定住促進協議会

☎(62)0260

<http://www.notown.jp/>

「能登町定住促進協議会」で

検索

12月から毎月1日・15日の朝にサイレンを吹鳴



12月1日から、毎月1日と15日の午前7時にサイレンを吹鳴します。これは、能登町消防団の定例出動の合図で、すでに能都地区では実施しているものです。今後は能登町全域に拡大します。

サイレンを鳴らす前に、消防団の招集サイレンである旨のアナウンスを実施します。サイレンが鳴っても火災ではありませんので、ご理解とご協力をいただきますようお願いいたします。

問能登消防署 ☎(76) 0085

能登高校×菜夢来

生徒と企業で共同開発 地元素材スイーツを販売

町で柿の栽培をしている志賀町の合同会社「菜夢来」と能登高校地域創造科生徒が、町の特産「平核無柿」を使った商品を開発し、10月15・16日に県産業展示館で開催された石川の農林漁業まつりで販売を開始しました。

開発したパイは平核無柿のほか、ブルーベリー、栗の合わせて3種類です。商品名

商品の特徴をお客さんに説明



を「能登パイ」として、1個350円、3個千円で会場に設けられた「農業高校・水産高校コーナー」に商品を並べました。地域創造科農業コースの生徒は、製品開発のポイントを説明するなど、熱心に販売実習に臨んでいました。



スイーツポテト作りも好評を博した

堂前靖彦さんが 農林水産業功労者表彰受賞

堂前靖彦さん＝笹川＝が10月15日、県産業展示館4号館で開催された第38回石川の農林漁業まつりで、谷本知事から農林水産業功労者知事表彰を受けました。堂前さんは長年にわたり林業に携わっていて、林業の振興や発展に大きく貢献した実績が認められ、受賞されました。



谷本知事から功労者表彰を受ける堂前さん

地域の生業を次世代へ 3氏が「ふるさとの匠」に

農林漁業に関する技術や文化の継承にあたる人材を認定する県の制度「ふるさとの匠」に町から3人が選ばれました。今回認定の3人を含め、町では18人が匠として認定を受けています。

洲崎一男さん（宇出津）	伝統娯楽「ごいた」の伝承
中 正道さん（上町）	あえのことの継承
中山吉男さん（国重）	マツタケ山の整備

ふるさとの匠 認定証交付式



ふるさとの匠に認定された（左から）中さん、洲崎さん、中山さん

3千人が本番さながらに 有事の備えを確認

9月25日、第5回町総合防災訓練が主会場の柳田小学校など、町内の7会場で開催され、あわせて3,103人が参加。災害への備えを再確認しました。



訓練は大雨による土砂災害を想定して行われました。午前8時50分に避難支持があり、主会場となった柳田小学校には地区の住民が続々と集まりました。柳田小の他に宇出津・松波・小木の各小学校と、小木中、旧鶴川小、宇出津新港のあわせて7か所で訓練が行われ、3,103人が参加しました。避難所では柳田中学生が避難者の受付や案内にあたりました。

し、各地で大きな被害が発生していたこともあり、多くの人が関心を寄せ、緊張感を持って訓練に臨みました。会場では防災ヘリによる負傷者の救助訓練や土のう作り、災害ボランティアセンターの開設、災害救助犬による救助訓練などが行われました。参加した児童・生徒も消防ポンプ車の放水や心肺蘇生法など、普段できない体験に真剣な表情で取り組んでいました。



消防団員の手ほどきを受け、児童も土のう作りを体験



災害ボランティアセンター開設の手順を確認



消火作業を体験する児童

柳田中屋上から、防災ヘリが負傷者を搬送した



できることを一つずつ 中学生が訓練運営に貢献

町では防災意識を高めてもらうことを目的に、フォトジャーナリストの高橋智裕さんを講師に招き、中学校の全生徒を対象とした事前授業を実施しました。自身も東日本大震災で被災した高橋さん。「災害現場は生と死が隣あわせにある場所」「命の重みを考えて」と呼びかけました。その上で、「町から一人も犠牲者がでないように、皆さんが主体になって頑張ってください」と生徒を激励しました。



全中学生を対象に行われた防災講演会。松波中では小学生も参加した（9月1日）

訓練では中学生が避難所の間仕切り設置や避難者の応対などで活躍しました。



生徒は間仕切りの組み立てや避難者の案内、炊き出しの運搬など、それぞれの役割を果たした。



自主防災組織を 立ち上げよう！

活動事例紹介① 重年防災会

平成24年2月9日結成
構成世帯数：32世帯

結成から4年が経過する重年防災会では、防災訓練や知識の普及、防災資機材の購入などを行っています。防災標語を募集し、意識を高める試みも実施しました。災害時には初期消火、避難誘導、情報伝達、給食・給水などを想定して備えています。



住民から募集した防災標語看板を設置

お互いに車いすを押し、要介助者の対応を確認

町では防災組織の結成から活動までをサポート。実践講座・出前講座などでアドバイスするほか、年間最大200万円の補助金も交付されます。詳しくはお問い合わせください。

総務課危機管理室
☎（62）8513

中山幸永さん

災害に備えるために

自主防災組織化が重要

防災でまず重要なことは「自助」。まずは自分で自分の身を守ってはじめて、家族や周りの人、地域の人を助けることができます。

重年防災会会長 日本防災士会県支部理事 中山幸永さん

公的援助が来るまでの最も大変な時を、地域の皆さんを始め、そこに避難してきた人たちが共に助け合い過ごす必要があります。これが「共助」です。公的機関も被災するため、初期段階は活動が制限されます。災害の発生直後は自分、そして近隣の皆さんで過ごさなければなりません。この、「自助・共助」の動きを実践するのが防災士です。平

常時の防災意識向上も防災士に求められています。防災、減災対策をしても、想定を超える災害が発生しています。最後に頼れるのは一人ひとりが持つ対応力です。自分の命は自分で守る。さらにできるだけ多くの人も助けたい。そのために、自主防災組織を立ち上げ、組織化し、訓練を重ねて日頃から家族で話し合いましょ。

人間の暮らしを支える「里川」の役割を考える



9月17日、国民宿舎能登やなぎだ荘で町と国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（UNU-IAS OUIK）主催の「第5回能登の里海シリーズ講座」が開かれました。

世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」。里海を支える川が存在について、地域の暮らしや食文化、環境を含めた視点で考える講座に約60人が参加し、身近な川の役割について理解を深めました。



講義
「町野川が育む
生き物たち」
たにぐちまさしげ
谷口正成さん
(元柳田村立黒川小学校長)

教員生活のかたわら、40年にわたり町野川や山田川の水生生物調査を継続してきた

谷口さん。調査の対象はミリ単位の小さな底生生物です。町野川では支流を含めた13地点を年4回、調査しました。水量の変化や河川改修工事の影響などで生物の種類や数が変動することから、「生物は河川の自然状況を反映する『モノサシ』です」「住む人の川への愛情や関心が薄くなっているのではないかと感じています」と話しました。

講義
「里海を支える
里川の役割」
せいのだとこ
清野聡子さん
(九州大大学院准教授)



清野さんは沿岸・流域環境保全学を専門としています。高度経済成長期の過剰な河川利用や、河川流入が止まったため漁業に影響が出た事例を紹介。あるべき姿で維持するために、流域の複数の自治体の合意形成が必要であることや、地域の風景・文化を含めた総合計画の重要性について強調し、「日本海は川の影響を大きく受ける場所です。新しい風を能登から起こしてください」と呼びかけました。

パネルディスカッション

モデレーター…イヴォーン・ユーさん（UNU-IAS OUIK）
パネリスト…清野さん、谷口さん、山下勝男さん（前柳田河川漁業協同組合長）、藤平朝雄さん（能登半島広域観光協会相談役）

パネルディスカッションでは4人のパネリストが、文化がどのように川を支えてきたのか、また、川がどのようにして文化を育んできたのか、専門分野から意見を発表しました。現在、直線的に整備されている町野川の河口は、かつては潟湖（ラグーン）を形成していました。天然の良港として北前船などが発着し、商業が発展。河口から上流まで、一本の川によって文化が形成されていました。

海とつながるだけではなく、人と人、人と自然をつないできた町野川。「今後どんな川にするのか、地域ぐるみで考えることが大切」と確認し、講座のまとめとしました。



パネルディスカッションの様子（写真上）、町野川の文化について語る藤平朝雄さん（左下）、ひねずしの歴史を話す山下勝男さん（右下）



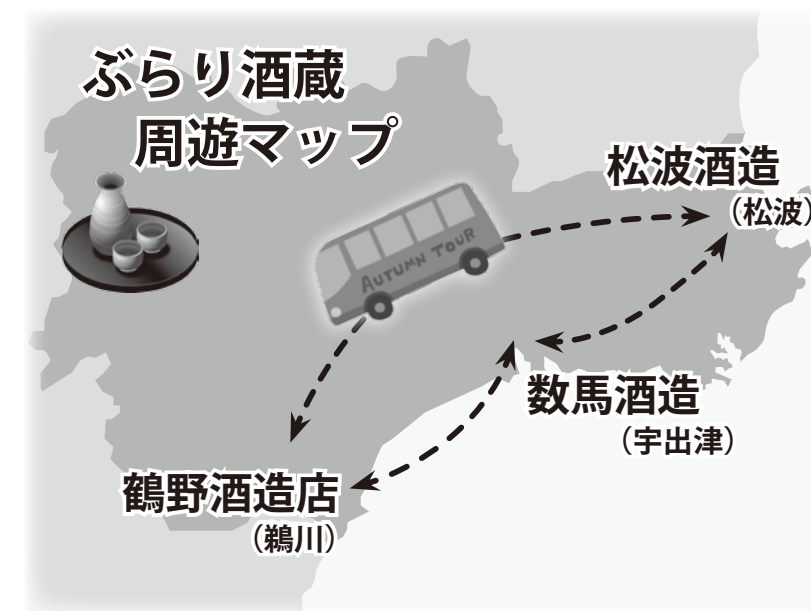
【大江山】
松波酒造（松波）

酒蔵で写真家「中乃波木」さん製作のタペストリーが展示されたほか、命中した商品を獲得できる輪投げゲームなどで盛り上がりました。女性作家による珠洲焼酒器や酒まんじゅうなどのスイーツが販売され、幅広い年齢層が楽しめる催しとなりました。



町内にある3つの酒蔵が一緒に蔵開きをする催し「ぶらり酒蔵めぐり」が9月18日に開催され、多くの日本酒ファンが町を訪れ、各蔵で試飲や酒蔵見学、コンサートなどのイベントを楽しみました。各酒蔵間にはシャトルバスが運行され、運転の心配をせずに蔵巡りを楽しむことができました。各蔵では蔵人のコスプレやスイーツの販売など、お子さんなど酒を飲むことができない人も楽しめるような仕掛けが用意され、来場者をもてなしました。

酒造りの本場を散策 ぶらり酒蔵めぐり



【竹葉】
数馬酒造（宇出津）

酒蔵を舞台にした雅楽演奏や学生による酒造り「Nプロジェクト」の取り組み発表がありました。物販では酒粕からつくられた新商品「酒粕石けん」の販売などが行われました。蔵の前には移動販売車で、酒粕や純米酒をシロップにしたかき氷の販売もありました。



【谷泉】
鶴野酒造店（鶴川）



袋に入るだけ自由に持ち帰ることができる「酒粕詰め放題」。使用されたのは自動絞り機ではなく「ふね」で絞られた味わい・香りが豊かな酒粕です。めがらすなど焼きたてのおつまみや、陶芸家・マスケイコさんの酒器の販売も行われました。